

(2) 調査遺跡の概要

はぐるじんじやにし 羽黒神社西遺跡

遺跡番号	208-159
調査次数	第1次
所在地	山形県村山市大字名取字清水
北緯・東経	38度31分01秒・140度22分25秒
調査委託者	国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所
起因事業	東北中央道（東根～尾花沢）
調査面積	4,300 m ²
受託期間	平成26年4月1日～平成27年3月31日
現地調査	平成26年5月19日～11月20日
調査担当者	大場正善（現場責任者）・長谷部寛・阿部明彦
調査協力	村山市教育委員会・村山教育事務所
遺跡種別	集落跡
時代	縄文時代（早期・中期大木8b式段階）・平安時代
遺構	捨て場遺構・フラスコ状土坑・陥穴・土器敷き石囲い炉
遺物	縄文土器・打製石器・磨製石斧・礫石器・須恵器・砥石（文化財認定箱数：410箱）



遺跡位置図（1：50,000）

調査の概要

遺跡の位置 羽黒神社西遺跡は、村山市大字名取字清水に所在する。遺跡は、最上川の難所・三ヶ瀬の「隼の瀬」の南から約1.8km離れた、河島山丘陵の東側に舌状に張り出した丘陵地に立地する（写真1）。遺跡周辺は、「清水」という字名が示すように、近隣に湧水する場所がいくつか認められる。北西に約4km離れた同市富並には、縄文時代中期の環状集落跡として有名な西海湖遺跡があり、そのほか市内湯野沢の中村A遺跡、土生田の落合遺跡など、近くには縄文時代中期の

遺跡が多く存在している。

調査の経過 今回の調査は、東北中央道（東根～尾花沢）建設工事に伴い、遺跡範囲、約4,300 m²の調査となる。事前に行われた試掘調査では、縄文中期の土器（大木8b式）が多量に発見された。そのことから本遺跡は、縄文時代中期の集落跡であることが予想された。今回は、調査範囲のうち、西側の1区と2区について調査を進めて終了し（図1）、東側の3区と4区については、遺構の掘り下げなどの具体的な調査は、次年度に行う予定である。

遺構と遺物

戦後の土地改変 1区は、戦後すぐに桑の植樹が行われたことを示す溝が、十数条認められた。そのため、1区は、戦後の土地改変によって、遺跡の一部が壊されていることが判明した（図2の左側）。

縄文中期 調査では、形や文様から縄文時代中期（約4,500年前）に位置づけられる縄文土器片（大木8b式）が、3区と4区で大量に発見された（写真2）。大木8b式土器の1段階古い大木8a式も少量含まれているが、大半が大木8b式であることから、中期の中ごろのごく

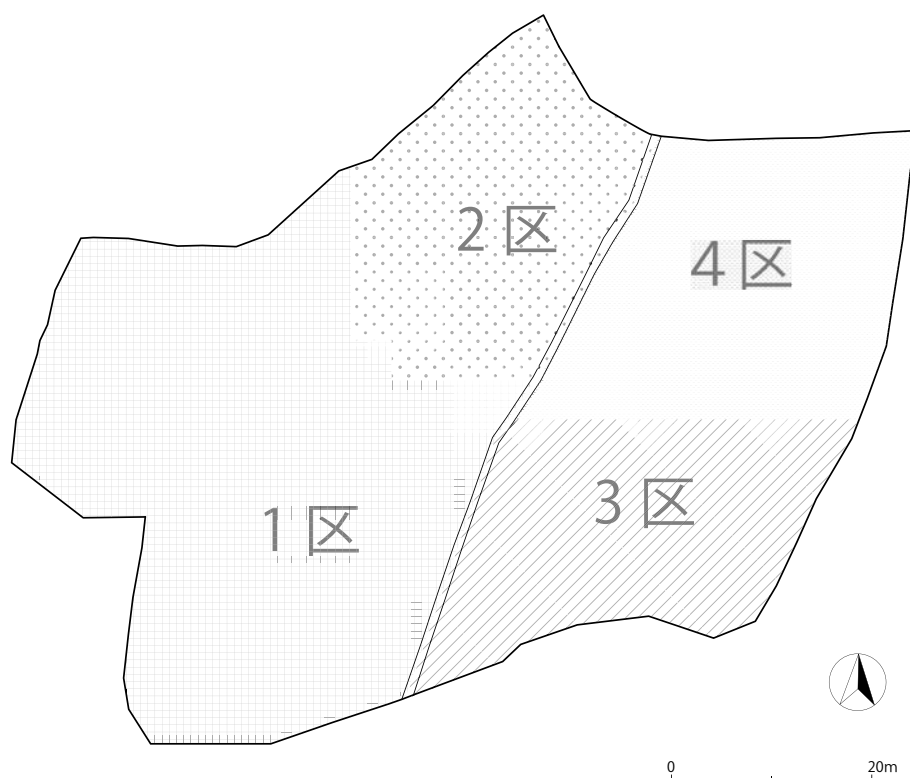


図1 調査区概要図

短期間に大半の遺物が残されたと言える。大木 8b 式土器とともに、石器などの遺物も出土していることから、土器以外の遺物も縄文中期中ごろのごく短期間の所産であると考えられる。今後、次年度に繰り越した 3 区・4 区の調査成果と合わせ、具体的な年代について追究していく予定である。

遺 構 発見された遺構は、3 区で 10cm 程度の石で囲った 1 基の石囲い炉や石で囲った内側に土器片を敷き詰めた 1 基の土器敷き石囲い炉（写真 4）、1 区の丘陵の尾根上で、径約 1.5m、深さ約 2m の 4 基のフラスコ状土坑（そのうち、2 基は重複している：写真 3）、1 基の^{おとしあな}陥穴と考えられる土坑がある。とくに、フラスコ状土坑は、下半部が人為堆積で、上半部が自然堆積であることから、掘って崩れる前に半分だけ埋め立てられ、あとは野ざらしの状態であったことが考えられる。そのほか、土を埋め立てて整地した痕跡も発見された。また、とくに調査区に東側の南斜面と北斜面では、大量の土器片と石器などの遺物が密集する集中部も認められた。

石 器 発見された遺物は、大量の縄文時代中期の土器片とともに、大きな石皿や^{すりいし}磨石、^{なた}敲き石といった礫石器のほか、磨製石斧と、石鏃や石匙、錐形石器、ヘラ形石



写真1 調査区全景（北から）

器、^{いけい}異形石器などの打製石器がある。大量の土器に比べて、打製石器が少ないことも特徴的である。山形県内は、最上川流域の河川で、石器の素材となる^{けいしつげつがん}珉質頁岩が豊富に産出しており、寒河江市や大江町付近を中心に、石器を集散的に製作した遺跡が多く存在する。しかし、本遺跡の近隣では、珉質頁岩が採れないので、そのような環境が打製石器の少なさに表れていると考えられる。

土器・土製品 土器は総じて装飾性が高く、深鉢形や浅鉢形をしたもの、また大きさも、かなりの大型品からミ

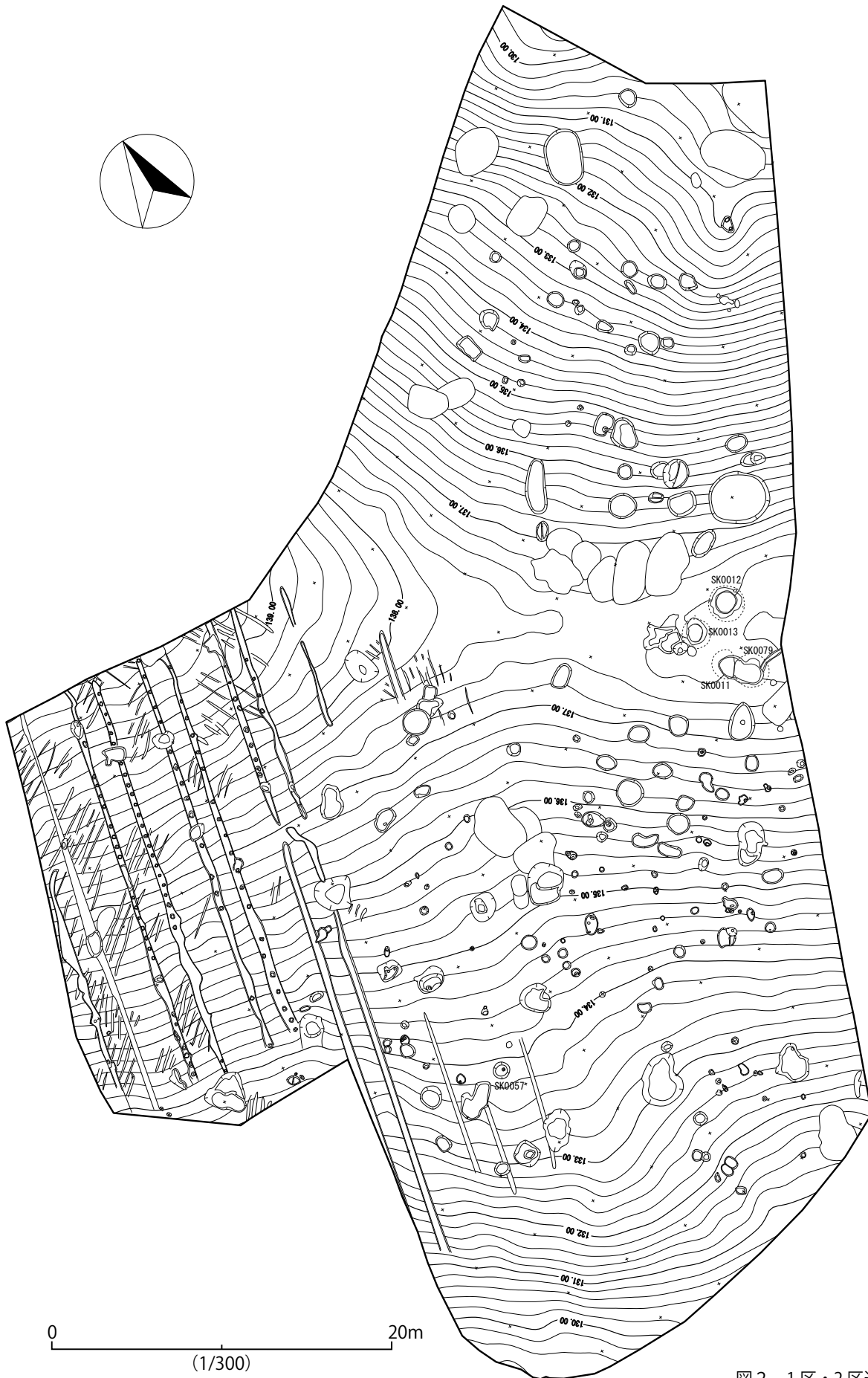


図2 1区・2区遺構配置図



写真2 4区遺物出土状況（北から）



写真3 1区フラスコ状土坑（SK0012）堆積状況（東から）



写真4 3区土器敷き石囲い炉（SL0229）検出状況（南から）



写真5 発見された土偶

ニチュア（小型のもの）までである。土偶は5体、あるいは7体発見されており、そのうち1体は一個体に復元できる（写真5）。もう1体は、脚部のみしか発見されていないが、大型で精巧な文様が施されている。また、国宝・西ノ前遺跡出土「縄文の女神」と同じ形と考えられる土偶も、腰部のみであるが発見された。さらに、2点の土笛と思われる袋状土製品（写真6）のほか、用途不明の円管形土製品も発見された。

早期の遺物 このほか、中期の遺物が出土した地層よりも下位の地層からは、縄文時代早期（11,000～7,000年前）の押型文土器おしがたもんや条痕文土器じょうこんもん、尖底土器せんていなどの遺物が発見された。本遺跡が、1万年以上前から、生活の場として利用されていたことがうかがわれる。

古代の遺物 また、ごくわずかであるが、須恵器や古代のものと思われる砥石が発見された。近隣の清水遺跡は、当センターの調査により平安時代の集落跡であることが明らかになっており、本遺跡にも平安時代のヒトが足跡を残していた可能性があると考えられる。



写真6 発見された袋状土製品

まとめ

本遺跡の調査では、縄文時代中期中ごろの遺物が大量に発見された。その一方で、遺構については、遺物量に比べて少ないことが言える。今後の3区と4区の調査によって、住居跡などの何らかの遺構の存在が判明すれば、本遺跡における縄文時代中期中ごろの生活の様子が明らかになることが予想される。